

俳句の未来をつくり出す

—多様化する選択肢—

神野紗希

「今の若手は、結社に入って真面目に俳句をやる人が少ない」と言われる。上の世代から見れば、真面目に俳句をやることは結社に入ることで同義のようだ。確かに昔は、道は結社入会しかなかったのだろう。しかし、俳句との関わり方が多様化した現在、「真面目な若手」と「結社にいる若手」がイコールで結ばなくなっている。つまり、結社外に「真面目に俳句をやる若手」が増えているのである。現在、結社には属さず、一对一の私淑関係を持つ若手が増えている。佐藤文香と越智友亮も、その一人だ。

鞆の裏を映せるにはたづみ 佐藤文香

冬の金魚家は安全だと思ふ 越智友亮
佐藤の句、水溜りに映るぶらんこの板の裏、雨上がりの青空が想像される。越智の句は、冬の金魚に、現代を生きる自分の茫漠とした不安感を託している。口語文体がその気分をよく表している。

佐藤は、インターネットのHPやブログを持ち、俳句の私感を発表する。作品発表の場は、同人誌「里」にある。句会は超結社のものに参加しているという。昨年六月には、第一句集「海藻標本」を出版した。

越智は高校生だが、ブログで俳句の鑑賞をしたり、学校の俳句仲間と句会をしたりして、

積極的に取り組んでいる。二人は、池田澄子に私淑している。紹介や勧められたのではなく、二人とも、作品を読んで、自ら選んでその戸を叩いたのだ。

壮年世代の主宰する同人誌が増え、師事したいほど魅力的でも結社を持たない中心作家も増えている。池田澄子をはじめ、大木あまりや正木ゆう子、權未知子や山西雅子などもそうである。彼女らに師事したいと思えば、結社という選択肢はない。つきたい俳人を選べば、一对一の私淑関係を結ぶことも、現代では必然の結果なのだ。

また、師弟関係を持たないケースもある。富田拓也は、結社に属さず、誰の教えも請わず、ただひたすら塚本邦雄ら前衛文学の成果を読み込んで句を作り、第一回芝不器男俳句新人賞を受賞した。

気絶して千年氷る鯨かな

富田拓也

自らの死に気付かない鯨は哀れだ。しかし「かな」によって、あつけらかんとしたニュアンスが出、悲愴感が剝落しているところが現代的である。彼は現在も、誰にも師事していない。作品発表は、雑誌や同人誌の依頼による。また、インターネットサイト「豈ウイークリー」では、「俳句九十九折」と題して、アソロジーの形で近代俳句の歴史を捉え直す連載を持つなど、旺盛に活動している。阿部青鞋や小宮山遠など、忘れられている俳人が積極的に取り上げられており、面白い試みだ。彼らは、発表の場を同人誌に求め、超結社句会で研鑽し、ネットで批評活動を行う。必要ならば、個人単位で師弟関係を結ぶ。発表の場や句会、師匠といったものは、結社に入れば、通信教育のセットのように一度についてくる。しかし彼らは、それらを自分で個別に選びとる道を選んだ。今までは違ふ、新たな俳句との関わり方だ。彼らは不真面目な

のではない。結社に属することが、真面目に俳句をやることの必須条件ではなくなっただけである。

しかし、これらの若手新人類の出現に難色を示すのは、案外、上の世代よりも若手自身なのかもしれない。「豈」四十七号(平20・11)の特集「青年の主張」で、村上鞆彦は次のように述べる。

「私はただ、先人たちが大切にしてきたものをそのまま大切に受け継いで、伝統的な有季定型論を墨守してゆきたいと思っただけである。そもそも、何か新しいことをしようと思ったならば、俳句など選びはしなかった」

彼をはじめとする三十歳前後の若手は、数年前に「ルート17」という団体を立ち上げた。この団体の参加条件は「入会時点で三十歳以下。結社に所属した上での、ある程度の句歴」である。結社に属している若手には、いまだ

に、真剣に俳句を取り組むことが、結社入会とイコールだと考えている人が多いようだ。

自らの仲間を選ぶのに、作品ではなく履歴でふるいをかける方法には違和感を持つが、しかし、ルート17にも魅力的な俳人はいる。

いちまいの水となりゆく薄氷 日下野由季
ガラス戸の遠き夜火事に触れにけり 村上鞆彦

「いちまいの水」「夜火事に触れ」といった表現には、修辭の繊細さが光っている。若手の俳句スタイルは二極化されつつあるが、どちらにも若手は確実に存在し、真面目に俳句をやっているのだ。

しかし、当の俳壇が若手の不毛を嘆くばかりでは、時代を担う若手はいつまでたつても誕生しないのではないか。もちろん、未来の雑誌購読者の確保と結社制度保持の観点から言えば、若手の人数は多いに越したことはな

いので、嘆きは尽きないのだろうが。

ここに、飯田龍太が書いた、高柳重信との面白い逸話がある。

「君は、いまの若手で、期待出来るのはどんなところなんだ」と聞くと、これまた即座に、「ひとりも居ない」と、ハッキリ答えた。そして、しばらく沈黙したあと、「でも、期待出来ても出来なくとも、あと押ししてあげないと、俳壇はますます悪くなるばかりなんだ」と、慥然とした面持ちで呟いた(『高柳重信全集第二巻』葉「栄光と不幸と」)

龍太は重信の死後、「俳壇」(昭61・8)の「二十代三十代作家八十人集」を取り上げて、新人紹介「新鋭の諸相」(「俳句研究」同・9)を書いた。ここで見出されたのが、岸本尚毅や長谷川権、小澤實ら、これからの俳壇を担うであろう「昭和三十年世代」(小川軽舟著「現代俳句の海図」角川学芸ブックス)だ。

その一人、小澤實が、自身の主宰誌におい

て「二十代三十代の俳人」を特集した(澤平19・7)。取り上げたのは十三人。「俳句朝日」(平17・8・9)の「若手俳人参上」の六百人、「俳句研究」(平19・7)の「新鋭俳人競詠」の四十人に比べると、本当に少数である。小澤は「若手特集は編集者がある程度まで絞り込んだ上で、作家に依頼すべき」と言うが、まさにその通りだろう。

相対化の現代、どれも素晴らしいと優劣をつけるのを厭えば、ムーブメントも新人も絶対に生まれない。俳句の未来は、ただ待っているだけでは、永遠にやっつては来ないだろう。未来は、俳壇と俳人が協力して、自らの手で生産していかなければならないものなのだ。

